

銅の素材に魅せられて

銅板造形家 赤川政由



私は、銅板を使用して造形物を創り続けている銅板造形家です。素材の持つ可能性に魅せられて、作品作りの材料として長く銅を使用してきました。何故ここまで銅にこだわってきたのか。この40年を振り返ってみました。

制作に当たってはまず1mmから12mm厚の銅板を、型紙に合わせて金切りバサミで切り、叩いて表面に植目や荒らし模様をつけ、自分なりのテクスチャーを作ります。さらにバーナーであぶり、なまします。その時、熱の加減で表面に焼色をつけます。その後、曲げたり絞ったりして、かたちをつくり出します。組み立てには、酸素とプロパンガスを使い、銅ろうで接合します。作るものは主に人のかたち「銅人形」です。

銅の不思議

銅板をバーナーで800℃ほどに熱した後、ある液体に浸けると、ほうしゃや仕上げ独特の見事な緋色が現れます。この色こそが、私の作品で大切にしているものです。銅は加熱することにより、炎の当たり方でさらに様々な色が現れます。単体元素の金属であるはずなのに、この加熱の工夫によって銅は自然の樹木の色を様々な表現で表現できるのです。私はよく大きな樹をモニュメントとして制作します(半田市役所前・お話の樹(奥多摩駅前・命の樹)。木々によって異なる樹皮の色、葉っぱの色、そして秋に色づいた赤色、様々に変幻自在な表現は他の金属ではできません。

街の中にたたく銅人形

埼玉県行田市商店街に、39体のわらべの銅人形が設置されています。昔の子供たち(童)が遊んでいる姿を今に再現したものです。20年ほど前に完成したこの作品は、住人の方々に今でも愛されているようです。最近では、国立市の三小通りのバス停前に設置された4つの銅人形。地主のオーナーと一緒にテーマを相談しながら制作しました。バス停前の道路沿いに間隔をおいて立っています。台座は街灯を備え、夕方になると灯火されています。オーナーが名付けた「今日無事」「毎日感謝」「日々精進」「二期一会」の4体。作品



立川駅前の「風に向かって」



①今日無事 ②日々精進 ③毎日感謝 ④一期一会
「ほほ笑み返しの町」の4体



緋色のほうしゃ仕上げが見事にできました



立川駅前のモニュメント「南の風が吹く頃」

優しい表情が表現できる銅の素材



自然の樹木の色など、様々な世界を醸し出す銅の素材

とあいまって、そのタイトルは人々の興味をかき立てているようです。ゆつくりと歩を進め、眺めていく人たちがいつの間にか微笑んでいきます。何気なかった街にほのかな心の灯火が灯ったようです。銅の柔らかさが醸し出す表情ならではだと思いません。そんな優しいまちづくりが始まりました。銅板を使用した銅板造形物が、日本の街のあちこちに設置されて、皆さんの心々に温かみや、微笑みを波紋のように投げかけているのです。

重だつた銅も、だんだん私達の生活から遠ざかっていきました。10円硬貨が銅であることすら、子供たちに尋ねてもわかりません。その銅が造形作品として世間に現れることにより、我が国の歴史や文化の「記憶装置」となっていくのではないのでしょうか。JR立川駅前のデッキに、2000年から建っている少年の像があります。この「風に向かって」は、立川に戦前あった国際飛行場から1932年に飛び立った飛行機「ミスビートル号」をモデルにしています。この町から飛び立って、太平洋の無着陸飛行に成功しました。この町の記憶です。設置されたとき、少年が「なつかしい」と言ってくれました。できたばかりなのです。少年の心や記憶の中にあるDNAにスイッチが入ったのでしょうか。銅は、日本人の心の奥にちゃんとあり続けるんですね。そういえば、私の育った九州大分の神社の拝殿に鎮座していたのも、銅の鏡でした。いつも何かにつけて拝んでいたわけですから、銅とは、時空間を越えてのお付き合いです。銅に魅せられここまで来たのもうなずけます。

プロフィール

- 1951年 大分県日出町生まれ
- 2012年 川口市、モニュメント「街の記憶」制作
- 2015年 JR立川駅前に「南の風が吹く頃」制作
埼玉県東松山駅前に「街を歩けば風が見える」制作
- 2016年 愛知県半田市役所時計台モニュメント、
新見南吉記念「南吉さんのお話の樹・ゴンギツネ」制作
国立市三小通りに4体の作品制作

サンタフェの国際ドールフェスティバル、
ニューヨーク・アートエキスポに参加、
個展を開く



BONZE工房 銅板造形家
赤川 政由
あか がわ まさ よし

街の中に数々の造形作品を創作
その作品は全国40市町村に300体余
立川市に外人ハウスを借り工房にする